

JA全農は、①肥料②米穀③園芸④農薬⑤農機・段ボール⑥飼料⑦輸出——の各事業について、事業改革の具体策と年次計画を策定しました。全農自己改革の“新たな挑戦”を全8回シリーズで紹介します。

# 海外で農畜産物の新たな需要を開拓

## 改革方向

輸出専任部署や海外拠点を設置し、輸出事業の体制を整備。相手国・地域の輸入・消費動向の情報を得て産地につなぐなどマーケットイン(需要に応じた生産・販売)にもとづく事業戦略を実践し、重点国・品目別の生産・輸送・販売体制の構築をめざす

## 事業環境

- 日本の農林水産物・食品の輸出は、平成25年から4年連続で増加。28年は7502億円
- 政府は「平成32年に輸出額1兆円」の目標を、31年に1年前倒し
- 輸出額の内訳は、農産物(加工食品・畜産品含む)が61%、水産物が35%、林産物が4%。輸出先は1位香港、2位米国、3位台湾
- 農畜産物の国内市場が飽和・縮小する中で、海外での新たな需要開拓が不可欠

## 改革具体策

### 目標 牛肉、米、青果物を 中心に輸出拡大

	平成28年度	29年度	30年度	31年度
全体金額	130億円	174億円	207億円	340億円
うち牛肉	45億円	55億円	69億円	130億円
米	10億円	29億円	32億円	45億円
青果物	60億円	72億円	82億円	135億円

### 1 輸出の体制整備

- 全農に輸出対策部を設置し、輸出事業の統括と産地指導・育成を行う。輸出実務はJA全農インターナショナル(株)に集約。海外拠点はアジアを強化し、設置済みのシンガポール、英国、米国に続き、香港、台湾、タイ、中国に設置予定

### 2 国・地域別輸出戦略の構築

- 相手国の輸入動向、関税や検疫、消費動向などを把握し重点国・品目別の生産・輸送・販売戦略の策定と実践をすすめる
- ◎生産戦略
  - 米の輸出用産地(低コスト多収栽培)を育成する他、青果の輸出用産地を

- 開拓する。柿、イチゴ、ブドウ、桃でリレー出荷の体制を整備する
- ◎輸送戦略
  - 温度や酸素濃度を調節でき、品質保持に有効なCAコンテナの活用や、他産地との混載など共同物流によって輸送の低コスト化をめざす
- ◎販売戦略
  - 販売見込み先リストに基づき営業強化。販売機能強化のため、現地卸などへの出資・買収を含む連携をすすめる

## 年次計画

項目	29年度	30年度	31年度
1 海外拠点の整備	海外拠点の現地調査設立準備・設置		
2 生産戦略 (産地づくり)	米の輸出用産地の育成 実証試験・10JA 青果の輸出用産地の開拓 3産地	実証試験・15JA 専用産地・5JA 5産地(累計8産地)	実証試験・20JA 専用産地・10JA 10産地(累計18産地)
	リレー出荷体制の整備 整備:柿・イチゴ 試験:ブドウ・桃	整備:ブドウ 試験:桃	整備:桃
3 輸送戦略	品質保持技術 試験輸送 共同物流 産地の輸送実態の把握	順次実用化 混載に向けた働きかけ・順次実施	
	4 販売戦略の実践	営業強化やパートナー企業との連携 国別輸出戦略にもとづき順次拡大	